

# 地域の課題 研究者も考えます

19

ICT・交通



バイオーム 藤木 庄五郎代表

## スマホアプリで生物調査

スマートフォンを使って生物の調査ができないか。開発したアプリを使う利用者



そう考えるようになったのは、私が京都大学で東南アジア・ボルネオ島の熱帯林を調査していた時だった。ボルネオ島の最奥ともいえるジャングルの村々では、テレビも冷蔵庫もないのに、なぜか皆スマホだけは持っていた。

これほど世界中に普及しているスマホから生物の情報を集めることができれば、生態系をかつてない広範囲でモニタリングできるようになるかもしれないと考えた。博士号取得後、スマホカメラで撮影した生物種の名前を自動判別する人工知能(AI)を開発し、生物分布データをリアルタイムで収集するアプリ「Biome (バイオーム)」を公開した。

世界のあらゆるもののデジ

# 自然環境 デジタルで可視化

タル化が進んだ現代においても、自然環境だけはデジタル化から取り残されてきた。そのため獣害などの地域課題は、解決への道筋が見えにくかった。ロードキル(野生動物の交通事故)の問題も同様だ。高速道路などを除き、件数や動物の種類などの全国的データはほとんど蓄積されていなかった。

これまでに、帯広畜産大学と連携して「Biome」を使って一般の人からロードキル情報を集める実証実験にも取り組んできた。今後、本連載の研究実践プロジェクトでも獣害の状況把握のため、スマホを使った調査を松阪市で予定している。

スマホ端末から生物データを収集することで、地域課題だけでなく、気候変動による生態系の変化予測や、外来種の侵入状況の把握などさまざまな分野での課題解決に貢献できるかもしれない。

名古屋大学持続的共発展教育研究センター